



## フロントランナー Front Runner

とれたてのイチゴを手に、笑顔。震災後に結成された「亘理おらほのいちご生産組合」を応援し続けている。若い農業者が地域を変える力になると信じている=宮城県亘理町

津波で海水をかぶった農地で作物が育つかなかつた。ならば、塩に強い品種のトマトを植えてみよう。宮城県岩沼市の畑で都会から集まつた49人のボランティアと苗を植えたのは、2011年6月。流された家も車もまだひっくり返つたままのころだ。2カ月後、真っ赤な甘いトマトが実る。収穫ツアードは若い女性ボランティアたちの表情に満足感があふれた。

「農が持つ命の輝きを肌で感じた。何もなくなつたがれきだけの土地だからこそ、野菜が育つことが人々に与える力は大きい。農の力を広げたい。それが被災地の希望につながると実感しました」。

経済産業省の官僚を辞めて始めたNPO法人の活動に、確かな手応えを感じた。

食と農業を通じ、都會と地方を結びつけて5年以上。過疎に悩む地域から活性化の相談を受けて全国を飛び回る。都会の人々に農作業を体験させ、野菜を食べてもらうグリーンツーリズムを仕掛けよ

卷文彦さん(45)は、実は震災直後、農業をやめようかと考えていた。それが、トマトと一緒にカブ、白菜に挑み、「岩沼白菜」はブランドに育ちつつある。「命の恩人って言うと大げさかな。もう一度やろうという気持ちと再起への道を作ってくれた」

震災から4年。いよいよ必要なのは農業を含めた産業の復興だ。やる気のある農家が継続的に食べていける仕組みを作りたい。昨年6月、東京都千代田区で地方の野菜や特産品を売る店「ちよだいちば」を開いた。亘理の大粒なイチゴがぎゅっと詰まつたジャムも、店頭に並んでいる。

# つなぐ農と食、被災地に希望

農商工連携サポートセンター代表

おおつか よういちろう  
大塚 洋一郎さん(60歳)

被災地は、活動の舞台であり続けている。食品関係の企業などから数千万円の寄付を集め、農家を支援したいと農協を訪ねた。だが、一律に寄付金を配るならいいが特定の農家は紹介できない。「生産地の農家と食をつなげたい。食べるけど作ることがつながると、生きている実感を味わえる」

● ● ● ● ●

# 「地域の魅力は、よそ者だからこそ気がつく」

フロントランナー  
Front Runner

(b1面から続く)

プロフィール



★1954年、東京都府中市生まれ。北海道大学工学部原子工学科を卒業し、同大学院修士課程を経て79年に科学技術庁(当時)に入庁。

★2002年、文部科学省の宇宙開発利用課長に。小惑星探査機「はやぶさ」の打ち上げに携わった。海洋地球課長として地球深部探査船を手がけ、米ワシントンに3年滞在。写真(中央)は科技庁時代の93年、鹿児島・種子島でH2ロケットの視察中。

★07年、経産省に異動し大臣官房審議官に。農商工等連携促進法の策定から施行、運用を手がける。09年7月14日に経産省を退職。同29日、農商工連携サポートセンターを設立。

★妻ありこさん(59)は北大の英語部の後輩。ひと目ぼれだった。役所を辞めることに大反対したが、NPO設立を前に「今まで家族のために働いてくれた。これからは私が恩返します」と言ってくれた。薬剤師として家計を支えている。息子が2人。

★サポートセンター愛媛事務局の米田佳代子さん(57)は「官僚辞めてはじめちゃって楽しそう。コンサルタントと違うのは、自分も地域の人たちと同じことをするところ。一緒に考えて寄り添っていく人です」。



「リコピンズの料理は本当にうまいんだ」盛り上げ上手だ=東京都千代田区の「ちよだいちは」

—農業で地域の活性化とは、どうやってやるのですか。  
まずは地域の人と集まって、どんな魅力があるかを書き出しながら話し合います。牛がいる、花が咲いているとか。魅力の再発見は、よそ者だからこそ気がつく。それをどう特徴づけるのか。話しあっていると、リーダーになる人が出てきます。その人を中心に、都会から人を呼ぶ方法や新しい商品開発について話を深めていきます。やりたいことがまとまると、こういう補助金が使える、そのためには設立協議会を作つて申請の書類を整えようとか、具体的なステップを手伝えます。使える補助金はいっぱいあるのですが、知られないものが多いのです。

—日本全国の過疎化に悩む地域では、若い人もいないし、立ちゆかなくなると悩んでいます。「何とかしない」と真剣に思ふ人がリーダーになつていきました。強いリーダーシップのイメージ

—どうして官僚を辞めて、NPOを立ち上げたのですか。  
役所では色々やらせてもらい、面白かった。でも大臣官房審議官になつて次は局長となると、現場から離れてしまう。このまま調整役を続けるのかと悩んでいました。政治家の朝食会で説明の順番を待っていたら、当時、年金問題で苦労していた厚生労働省の役人が終わって出てきました。その顔が疲れきって、どす黒く見えたんですよ。それを見て、もう役人は続けていけないと思い詰めてしまいました。そのころ、経済産業省でソーシャルビジネスの担当として、社会を良くしようと生き生きと活動する人たちにたくさん出会った。話を聞いているうちに、こっちの明るい世界に行きたく思つてしましました。でも、妻は大反対。3ヵ月間、口をきい

—NPOで何をしようと考えたのですか。  
役所を1年後に辞めますと宣言した時には具体的なことは決めていませんでした。最後に作った法律は農商工等連携促進法。当時の大臣が「これからは地域活性化のため経産省も農業をやろう」と号令をかけ、初めて農業分野に取り組んだのです。農業の生産分野と商品開発、流通をつなぐ仕組みを作つた。農業のNPOに誘われて耕作地の開墾作業も体験したのですが、しぶりました。体を使い、自分がすがすがしい喜びを感じました。それまで宇宙や海洋開発に携わりましたが、どこか遠い世界のこと

で抽象的。農業は人の生活に密着している。食べることと作ることがつながると、生きている実感がわく。農業体験を都会の人にしてもらいたい、生産者と消費者をつなげたいという思いが生まれました。

—ご自身は農業をやったことはないんですね。  
全くの素人。みんなから「大丈夫か。全然知らないじゃないか」と心配されました。「それが強くなる。どっぷりつかっている人には見えないことがあるんだ」と、まあ、負け惜しみも含めて言つました。でも本当ですよ。

宮城の被災地で塩に強いトマトを植えませんかと言つた時も「なに、ばかなこと言つんじゃ」と断られ、農家を探すのが大変でした。そんな気持ちになれといふ時期ではありましたが、無理だと考える人が多かつたんです。

—生みだした新商品を、どうやって売り出すのですか。  
人と物を双方で交流させることが大事です。土地の魅力を知つてもううため、農業体験のツアーやつては訪れてもらい、食べてもらう。行つた地域の特産品を都会でも買えるように、東京都千代田区と全国の产地16市町村が連携して「ちよだフードバレーネットワーク」を作りました。県のアンテナショップや大手の店では売れる商品しか置いてもらえないません。小さな市町村の特産品の店「ちよだいちば」(千代田区神田錦町2-17、平日午前11時半~午後6時)でなら販売できます。毎月1回、「いちばのちょい飲み」も開きます。毎回一つの地域の人々が来て特産品で料理を作り、客が食べて飲んで地域を知つてもらう会です。

常連のお客様も増えてきました。「おいしかった」「子どもが野菜をいっぱい食べてくれた」などと言ってくれます。「ありがとうございます」と感謝されるのは、本当にうれしい。役人の仕事はもちろん大事だし日本全体の役に立つりますが、実感がありませんでした。今は目の前で、喜ぶ顔が見られます。小さな店だけれど、大きな手応えを感じています。

## 大塚 洋一郎さん

農商工連携サポートセンター代表

◆次回は、DVから金銭トラブルまで、東京・新宿の歌舞伎町でよろず相談を受ける公益社団法人「日本駆け込み寺」の玄秀盛さんの予定です。